

ヒト ES 細胞の医療への応用に関する 仏教からの一考察

鍋 島 直 樹
(龍谷大学助教授)

(和文要旨)

科学と仏教は二律背反的な関係ではない。仏教と科学は相互の知見を分かち合い、人類と地球に恵みをもたらすように導くことが願われる。ただ科学に極端に依存しすぎてはならない。なぜなら科学の応用には有益性と危険性とがあるからである。その意味で、科学の進歩にある程度の規制を加えるシステムをもつことが必要である。この論では、はじめに、2001年9月25日に文部科学省から発表された、日本の生命倫理委員会「ヒト ES 細胞の樹立及び使用に関する指針」の概要を紹介したい。次に大乘仏教の生命観、特に浄土真宗に伝えられてきたいのちの見方を通じて、ES 細胞の医学的応用の倫理的な意味づけについて考慮したい。

根本的に、ヒト ES 細胞の使用目的を明確にする必要がある。ヒト ES 細胞の応用技術は、どこまでも難病治療のためだけに活用されなければならない。人間の育種を含めて、生命の健康や安全性を侵すことは、バイオテクノロジーの悪用に他ならない。縁起の生命倫理 (Bioethics of interdependence) は、私たちが単に役に立つかどうかという有用性の判断だけで、生命操作を行うことを決定してはならないことを意味する。テクノロジーが、私たちを、より宗教的、倫理的にするかどうか、次の世代にとっても社会的に責任のとれるものであるかどうかを慎重に考慮しなければならない。さらに、テクノロジーの応用を通じて、人類と他の生命体とが助けあい、分かちあうという豊かな心や感謝の心を育てていかなければならない。

(SUMMARY)

The relationship between science and Buddhism is not contradictory, for each can mutually understand the knowledge and wisdom of the other and bring benefits to humans and the Earth. But Buddhism teaches that people must avoid an extreme dependency on scientific technology, because the application of technology has both

beneficial and dangerous aspects. In this sense, Buddhists believe that it is necessary to bring a certain degree of regulation into the progress of science. In this paper I will first outline the Japanese National Bioethics Committee's "Guiding Principles of the Establishment and use of Human Embryonic Stem (ES) Cells" published by the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology on 25 September 2001. Second, I will interpret the ethical implications on medical applications of human ES cells through Mahayana Buddhist vision of life, especially as informed by the Jodo Shinshu Buddhist tradition.

Fundamentally, it is necessary to make clear the purpose of using human ES cells. The Application Technologies of Human ES Cells are only utilized to cure intractable disease. To harm the health and safety of life in the future, including a kind of human breeding, is nothing but a misuse of biotechnology. A vision of interdependence requires that we not make decisions based simply on our utilitarian value judgment, or by the fact of whether or not the technology is useful for us. We must consider very carefully whether the technology can make us more religious, ethical, and socially responsible for next generations. Moreover, we should cultivate our sense of sharing our lives with other life forms and our gratitude to other living beings, through applications of technologies.

はじめに 仏教とバイオテクノロジーの関係

バイオテクノロジー（生命工学）は人間の生み出した知恵である。バイオテクノロジーは、生命現象や生物機能を人為的に操作する技術の総称で、遺伝子の組み替え、細胞融合などの技術をもとに、医療、畜産・植物における育種、環境保護などの、多様な分野への応用をめざしている。科学技術それ自体は善でも悪でもない。科学技術およびその一つであるバイオテクノロジーの応用は、自由選択（随意選択的な目標 an optional goal）であって、究極的な目標ではない。とはいうものの、私たち人間の欲望は強く際限なく、常に過ちをおかすことを自覚しておくべきである。テクノロジーの自己中心的な利用は、他の生命体の尊厳を一方的に傷つけ、ひるがえってそのテクノロジーによる改変が、人類をもまた傷つけうる。

ふりかえてみるとバイオエシックス（生命倫理）は、人間の理性を過信して宗教を軽

視したヒューマニズム⁽¹⁾、または、主として成人社会の利益を優先する功利主義的な倫理になりがちである。その意味では、バイオエシックスの規律は、一つの狭い人類中心の倫理 (human centered ethics) として展開してきた。しかしながら、私たち人間の生活は、特に動物を初めとする他の生命体によりかかっている。したがってこれからのバイオエシックスは、エコロジーの視座、すなわち、人類と人類以外の生命体との共生という見方を発揮していくべきであろう⁽²⁾。

縁起の生命倫理 (bioethics of interdependence) は、私たちが他の生命体の視点から世界を見る力を培うことが求められる⁽³⁾。縁起のバイオエシックスは、私たち人類が、あらゆる存在と一つであるという感覚 (万物一体観) を養うことをも求める。人類の幸福だけを追求する功利主義的なバイオエシックスは、相互に生かされて生きているという縁起のバイオエシックスに方向を転じていくべきであると考えます。まず、私たちは人類の多くの問題が人間の優越感に根ざしていることを認識しなければならない。第二に、自分を支えるすべての生命と存在に感謝し、自己とあらゆる存在との調和と一体感を育んでいく必要がある。この自他一如の生命観、あらゆる生命の響生ともいべき姿勢を持つことによって、私たちは、バイオテクノロジーの知恵をよりよい形で応用する道を見いだせるだろう。

科学と仏教は二律背反的な関係ではない。仏教と科学は相互の知見を分かち合い、人類と地球に恵みをもたらすように導くことが願われる。ただ科学に極端に依存しすぎてはならない。なぜなら科学の応用には有益性と危険性があるからである。その意味で、科学の進歩にある程度の規制を加えるシステムをもつことが必要である⁽⁴⁾。

仏教と科学がよりよい関係を創造していくためには、次の四つの姿勢が大切である⁽⁵⁾。第一に、自己中心の視野から宇宙的規模の視点への転換である。宇宙のあらゆるものが相互に依存しあい、関係しあっていることにめざめるには、自己中心的な我執を離れ、広い視野をもつべきである。

第二に、近代科学の価値観を重んじて、あらゆるものを物質や数式に還元してとらえるのではなく、あらゆるものがそのまま独自の存在意義を持っていることに気づくということである。

第三に、無常の知見を生かすことである。あらゆるものは因と縁によって生じ、支え合いながら関係の中で成立し、時とともに、うつろい変化していく。無常の道理が私たちに与える知見は、あらゆる命あるものは生じては滅するということと、他面、あらゆるものは、時代とともに、変化し成長を遂げていくということである。したがって一つは、科学

が進展しても、命あるものはいつか死に帰すという道理をありのままに受け容れる必要がある。もう一つは、新しい科学の成果とその技術的応用を頭から拒絶するのではなく、移り変わり成長していく世界の姿と受けとめていくことが望まれる。私たちの生活は電気、ガス、水など衣食住からコンピューターや医療にいたるまで、科学技術の恩恵によっている。科学技術を最初から罪悪視して否定し、自然の摂理に回帰するべきであるという主張は、本当の意味で科学技術の知見を理解したことにはならない。無常の知見をもって、死すべきいのちの道理を受けとめつつ、新しい科学技術をよりよい方向に主導していくことが望まれる。

第四には、議論を重ねるだけでなく、生きとし生けるものと地球環境を保護するために具体的な倫理的指針を示し、行動を起こすということである。

仏教と科学とのあるべき関係について、ダライラマ14世がノーベル平和賞受賞スピーチでこう語っている。

14th Dalai Lama of Tibet Nobel Prize for Peace December 10, 1989, Oslo, Norway, Earth
Acceptance Speech

As a Buddhist monk, my concern extends to all members of the human family and, indeed, to all the sentient beings who suffer. I believe all suffering is caused by ignorance. People inflict pain on others in the selfish pursuit of their happiness or satisfaction.

Yet true happiness comes from a sense of peace and contentment, which in turn must be achieved through the cultivation of altruism, of love and compassion, and elimination of ignorance, selfishness, and greed.

The problems we face today, violent conflicts, destruction of nature, poverty, hunger, and so on, are human created problems which can be resolved through human effort, understanding, and a development of a sense of brotherhood and sisterhood. We need to cultivate a universal responsibility for one another and the planet we share. Although I have found my own Buddhist religion helpful in generating love and compassion, even for those we consider our enemies, I am convinced that everyone can develop a good heart and a sense of universal responsibility with or without religion.

With the ever-growing impact of science in our lives, religion and spirituality have a greater role to play reminding us of our humanity. There is no contradiction between the two. Each gives us valuable insights into each other. Both science and the teaching of the Buddha tell

us of the fundamental unity of all things. This understanding is crucial if we are to take positive and decisive action on the pressing global concern with the environment.

I believe all religions pursue the same goals, that of cultivating human goodness and bringing happiness to all human beings. Though the means may appear different, the ends are the same.

(日本語訳) 仏教僧として私は、すべての人間の苦しみに対してだけでなく、すべての生きとし生けるものの苦しみに対しても関心をはらっています。あらゆる苦しみは、無明によって引き起こされます。ひとは、幸福や満足を自己中心的に追求して、他人に苦痛を与えています。けれども真の幸福は、心の平安と足ることを知る心によってもたらせるのです。そしてこの心は、利他の精神、愛、慈悲の心を育み、無明と利己主義と欲望を克服することによって勝ちとることができるものなのです。

今日私たちが直面する暴力、自然破壊、貧困、飢えなどの諸問題は、人間が自ら作り出した問題です。ですから、努力や相互理解、また人類愛を育むことによって解決が可能です。私たちは、お互いに対しても、また一緒に暮らすこの惑星に対しても、宇宙的な責任感を養う必要があります。仏教では、敵すらも愛し、慈悲の心をもてと教えておりますが、信仰の有無にかかわらず、誰でも温かい心と宇宙的な責任感を育てることはできます。

止まるところを知らぬ科学の進歩が、私たちの生活に大きな影響を与えている今日この世界において、私たちの人間性を呼びもどすためにも、宗教と精神性が果たす役割は次第に大きくなっています。科学と宗教は互いに矛盾するどころか、それぞれに対する優れた洞察を秘めています。科学と仏陀の教えは両方とも、すべての存在が基本的には一つの有機的な統一体であることを説いています。私たちが地球規模の環境問題について積極的に行動するためには、この原理を理解することがどうしても不可欠です。

すべての宗教の目的は一つしかありません。人間の善なるものを育み、あらゆる人間に幸福をもたらすことです。手段は異なるように見えても、その目的は同じです。

すなわち、近代科学の弊害のみを取り上げて、科学を否認し、科学を用いない自然に回帰せよという方向とめざすのではなく、世界の諸宗教と科学思想とが協調して、相互に依存しながら、地球と人間に恵みをもたらすような方向を創出していくべきだろう。

この論では、はじめに日本におけるES細胞の医療への応用、その際の課題とを、文部

科学省の「ヒト ES 細胞の樹立及び使用に関する指針」と参考資料によりながら紹介したい。次に大乘仏教の生命観、特に浄土真宗の伝統に導かれたいのちの見方を通じて、ES 細胞の医療への応用の可能性について考慮したいと思う。浄土真宗は日本中世の親鸞（1173～1262）によって開かれた大乘仏教であり、あらゆる衆生の心の救いとめざめは、阿弥陀仏の本願他力⁽⁶⁾を通してもたらされると明かしている。

1. 日本におけるヒト ES 細胞の医療への応用

(1) ヒト ES 細胞とは

文部科学省によれば⁽⁷⁾、ヒト ES 細胞 (Human Embryonic Stem Cell) とは、「胚性幹細胞」と日本語では訳され、ヒトの身体を構成するあらゆる細胞に分化することができる可能性を持つ細胞であり、ヒト胚から樹立される。ヒト ES 細胞の二つの大きな特徴は、身体のさまざまな部分に分化する能力 (多能性) と、高い増殖能力が挙げられる。ただし多能性を持つ ES 細胞であるが、子宮に移植されても、人となることはない。多能性とは、さまざまな種類の臓器・組織・細胞に分化する能力を意味する⁽⁸⁾。アメリカ合衆国国立衛生研究所 (NIH: National Institute of Health, Bethesda, Maryland 20892⁽⁹⁾) が 2001 年 6 月に作成した報告書 “Stem Cells” によれば、

“Embryonic stem (ES) cells: Primitive (undifferentiated) cells from the embryo that have the potential to become a wide variety of specialized cell types.

すなわち、「ES 細胞とは、胚に由来する原始的 (未分化) な細胞であって、さまざまな種の分化した細胞になる能力を有するもの」である。この ES 細胞の特性を、日本でははじめは「全能性」と表現していたが、2001 年 9 月 25 日の指針では「多能性」という厳密な表現に改めている。全能性といった場合は、その細胞自体が個体へと発生しうる場合に使うことが多い。そこで ES 細胞は個体発生にまでにいたらないので、多能性という語を用いたと文部科学省は記している⁽¹⁰⁾。

(2) ヒト ES 細胞の医療への応用

ヒト ES 細胞は、さまざまな細胞に分化する能力と高い増殖能力を有するので、病気などで失われた細胞を補うという新しい治療法 (再生医療) に応用することができる。具体的には、ヒト ES 細胞の医療への応用により、パーキンソン病、脊椎損傷 (半身麻痺)、心

筋梗塞、心筋症、脱髄疾患、糖尿病、肝代謝障害、動脈硬化症、白血病、骨腫瘍、外傷による骨破損、骨粗鬆症、筋ジストロフィー、火傷などによる皮膚損傷などの治療が可能となる。今取り上げたいずれの病気も、現在のところ、薬によって症状を軽減させることはできて、根本的に治療することがむずかしいとされている。

またヒト ES 細胞はヒトにとってより安全で効き目のある医薬品や血液製剤を製造開発できる可能性があると考えられている。エイズや肝炎の感染などの心配のない血液製剤や輸血用血液が作成されれば、安全な血液製剤が人々に提供できることになる。またヒト ES 細胞由来の組織や細胞を利用することによって、実験用動物を使用することも削減できるといわれている。さらに事故などで失った部分を再生させる医療の基礎研究も発展させることが期待されている。

(3) ヒト ES 細胞を研究応用する上での問題点

ES 細胞はヒト胚から得られる細胞であるため、ヒト ES 細胞の研究を行うことは、ヒトの生命の萌芽であるヒト胚を研究し医療に応用するには、倫理的問題が生じてくる。

一つは、多能性の問題である。ES 細胞はからだを作るあらゆる細胞や組織に分化する能力（多能性）があるので、卵子や精子などの生殖細胞になることも可能であるといわれている。

二つには、ヒトと動物のキメラの問題がある。キメラとは、遺伝情報を事にする複数の細胞が混ざって個体を形成しているものである。動物の胚の中にヒトの ES 細胞が入るなどして、動物の中にヒトの脳や生殖細胞を持つ動物を作ることにも可能となる。

三つには、ES 細胞の安全性の問題である。ES 細胞を分化させることができて、体内移植後に意図しなかった細胞に分化してしまう危険性が残る。

したがって、ヒト ES 細胞はどこまでも難病の治療という医療のためにのみ活用されるべきであり、ES 細胞から生殖細胞を作成してはならないし、キメラを作成してはならない。そして ES 細胞の安全性を克服してはじめて、医療に応用することができるだろう。

さらに重要な問題は、ES 細胞を樹立するために、ヒト胚を使用する必要がある、どのようにそのヒト胚を医療に提供することができるのかという点である。日本では文部科学省が生命倫理委員会の議論とパブリックコメントを総合して検討した結果、2001年9月25日に「ヒト ES 細胞の樹立及び使用に関する指針」が文部科学省から出された⁽¹¹⁾。その指針の第二章第六条には、次のように記されている。

ヒト ES 細胞の樹立の用に供されるヒト胚は、次に掲げる要件に適合するものとする。

- 1 生殖補助医療に用いる目的で作成されたヒト受精胚であって、当該目的に用いる予定のないもののうち、提供する者による当該ヒト受精胚を滅失させることについての意思が確認されているものであること。
- 2 ヒト ES 細胞の樹立の用に供されることについて、適切なインフォームド・コンセントを受けたものであること。
- 3 凍結保存されているものであること。
- 4 受精後十四日以内のものであること⁽¹²⁾。ただし凍結保存されている期間は当該期間に算入しない。

したがって、ES細胞を作る目的で、精子と卵子を受精させて新たにヒトの生命の萌芽であるヒト胚を作成することは一切認めていない。どこまでも不妊治療の際に、ヒトの体外で作り出された受精卵のうち、その治療のために用いられることのなくなった「余剰胚」を、その凍結受精卵の提供者の同意をえたうえで、はじめてES細胞の樹立のために用いることができるというものである。

さらに指針の第二章第八条（分配の要件）には、次のように記されている。

ヒトのES細胞の分配は、次に掲げる要件に適合する場合に限り、行うことができるものとする。

- 1 第三十六条に規定する文部科学大臣の確認を受けた使用計画を実施する使用期間のみに対して分配すること。
- 2 必要な経費を除き、無償で分配すること。

すなわち、提供された貴重なヒト胚も、およびそのヒト胚から樹立するヒト ES 細胞も、商品のように決して売買されてはならないということを、この指針は示している。

したがって日本におけるES細胞の医療への応用に関しては次の五点を重視していることがわかる。

第一に、ES細胞の樹立に用いることができるヒト胚は、生殖補助医療で使用されることのなくなった余剰胚に限られる。

第二に、貴重なヒト胚の提供も、それによって樹立するES細胞も、医療への応用という合理的で倫理的な目的があって初めて認められる。

第三に、ES細胞の樹立に使用するヒト胚の提供者の個人情報 が 厳重に保護される。

第四に、胚の提供を受ける際には、提供者に対して十分な説明を行い、そのうえで、提供者の自由意思による同意（インフォームド・コンセント）をうけて、無償で行われる。

第五に、医療への応用に必要な適切なES細胞だけが、厳正で適切な手続きをへて活用される。

以上のような文部科学省の指針を私は一仏教徒として基本的に支持したい。

2. 仏教における縁起的生命観

ゴータマ・ブッダ（463~383B.C.）は、縁起の真理にめざめた。ブッダは「すべての存在が、互いに結びつき、支え合っていること」をさとった。さらに、ブッダは人間性の本質が浄らかであり、美德に満ちていることを見出したのである。縁起とは、「因縁生起」とも表現され、他との関係が縁となって生起することを原意とする。縁起の言語である複合語 *pratitya-samutpada*（プラティーティヤ・サムツウパーダ）は、二つの言葉から成っている。プラティーティヤとは、「～に依存する」ことを語義とし、サムツウパーダは、「共に生じる、つながりの中で生起する」ことを語義とする。あらゆる存在の因果性、相関性、相互依存性について、ブッダは次のように説いている。

「これあれば、かれあり。これ生ずるがゆえに、かれ生ず。

これ無ければ、かれなし。これ滅するがゆえに、かれ滅す。」

（相応部經典十二 南伝第十三卷四〇頁）（中阿含經典四七 大正蔵一卷七二三中）

このように縁起は本来、およそ次の三つの意味をもっている。

- 1) あらゆるものはすべて因（原因）と縁（条件）によって生じたり滅したりして、移ろい変化する。
- 2) あらゆるものは孤立して存在しているのではなく、相互に依存し、支えあい、関係しあって存在している。
- 3) 無条件にそれ自体として他に依らずに存在しているものは一つとしてない。固定不変の個体はない。

この縁起の内実を端的に言えば、「相依相成性」（interdependent co-arising）と表現できるであろう。また苦の生存になっている根拠が、無明（迷いに基づく認識）にあることを見き

わめ、この無明を滅することによって、苦しみをなくそうとした十二縁起説がある。

以上見てきたように、縁起とは、「相依相成性」、すなわち、あらゆる存在が、相依存し合って、相成り立っているという万有の真理を意味する。この縁起はわかりやすく説明すると、およそ次のような知見が確立されることを意味している。あらゆる存在は決して単独で生きているのではなく、互いに支えあっている。あらゆる存在は、因（直接的原因）と縁（間接的・副次的原因・機会）によって生じたり滅したりしながら移り変わっていく。あらゆるいのちのかけがえのなさをつながり縁起の思想は示している。

それでは、いのちのかけがえのなさをつながりとはどういう姿勢を生みだすだろうか。一つ一つのものが存在するということは、同時にそれとは異なったものがそれを取りまいて存在していることを意味する。人間社会における個人も独自の存在ということについても、同様である。したがってもし人間が他者の独自の存在の意義を認め、尊重することを忘れるならば、それはひるがえって自己の存在の意義を否定することにつながるだろう。個人の尊厳ということは、支え合って生きているという生命の相互依存関係において理解される。逆に言えば、個人が自分の都合のみを優先し、相互に依存していることを否定して、他者をあたかも自己の所有物のように操ったり、他者と対立して殺し合ったりしてはならないということを、縁起の世界観は示している。

3．親鸞におけるいのちの見方 浄土真宗の縁起的生命観

浄土真宗は親鸞によって開かれた一つの大乗仏教である。本質的に、浄土真宗の仏教徒は、全ての存在を差別することなく尊重する。親鸞は『歎異抄』第五章に次のように表現している。

「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり⁽¹³⁾。」

「(現代語訳) 命あるものはすべてみな、これまで何度となく生まれ変わり死に変わりしてきた中で、父母であり兄弟・姉妹であったのである⁽¹⁴⁾。」

ここに親鸞は時空を越えて、彼自身と全ての存在とを同一視している。彼の世界観は、縁起の普遍的真実に明かされた、心の温かさと思いやりの本来の姿を強調している。このように縁起は、私たちが相互に世界に対してとるべき責任と、慈悲と感謝の心を結晶させている。親鸞がそうであったように、網のようにつながる生命の結びつきの中で、人間だけが特権的な地位を独占してはならないということに私たちも気づくときには、感謝や謙

虚さが自然に私たちの心に生まれてくるだろう。

他の生命に対する感謝と謙虚さについての親鸞の見方は、大乘仏教の「一子地」の思想に基づいている⁽¹⁵⁾。親鸞の『顕浄土真実教行証文類』の行巻には、

「二つには念ずべし。慈眼をもつて衆生を視そなはずこと、平等にして一子のごとし⁽¹⁶⁾。」

と記され、また親鸞は『浄土和讃』に次のように書かれている。

「十方の如来は衆生を一子のごとく憐念す⁽¹⁷⁾」

さらに親鸞は『唯信抄文意』に次のように述べている。

「この如来、微塵世界にみちみちたまへり⁽¹⁸⁾」

仏の慈悲があらゆる存在に満ち満ち、あらゆる存在の尊厳が仏に連なっていると親鸞は理解するのである。親鸞にとって、仏とは目覚めることそれ自体である。この縁起の見方は、あらゆる生命を敬愛する心を育て、自己中心的に差別しようとする習性をなくすように私たちを導くであろう。

4 . 仏教からみたヒト ES 細胞の医学的応用への願い

(1) 縁起の生命倫理 (Bioethics of interdependence) は、私たちが単に役に立つかどうかという有用性の判断だけで、生命操作を行うことを決定してはならないことを意味する。新しい生命操作のテクノロジーが、私たちを、より宗教的、倫理的にするかどうか、次の世代にとって社会的に責任のとれるものであるかどうかを慎重に考慮しなければならない。さらに、テクノロジーの応用を通じて、人類と他の生命体とが助けあい、分かちあうという豊かな心や感謝の心を育てていかなければならない。あらゆる生命への感謝の気持ちがわき起こるとき、私たちは自分たちの人類中心的な欲望に目を覚まし、より謙虚に生きていくべきである。私たちは動物を含む、自然から多くの恩恵を長い間享受してきた。私たちの生命は、つねに人類以外の数限りない生命を犠牲にすることの上に成立している。したがって、私たち人類は、生命あるものたち (被造物) の頂点に立っているという優越感を捨て、あらゆる生命を友として尊重する気持ちを育てていくべきである。

ヒト ES 細胞の応用をめぐる、今後注意しなければならない点は、ES 細胞の使用目的が明確であるということである。ヒト ES 細胞の応用は、どこまでも難病治療などの医

療に限って用いられるべきであり、それ以外の目的では決して用いてはならない。たとえばヒト ES 細胞を用いて人間と動物のキメラを作成することや、ヒト ES 細胞を用いて卵子や精子の生殖細胞を作成し、あらかじめ特定の遺伝的形質をもったヒトを誕生させることなど、ES 細胞の悪用によって、生命の安全性を侵したり、特定の人間の欲望のみを満たしたりすることに用いられてはならない。動機が悪いと知りつつ科学技術を応用することは、知らないで行った行為よりも、さらに自他ともに不幸におとしめる結果を未来に生じることになる。自己だけでなく他者にとっても、現在だけでなく未来においても、身心の安らぎをもたらすように行為するのが、仏教徒の願うべき姿勢である。また悪い結果を引き起こしたならば、自らの誤った行いを慚愧して、将来二度と過ちをくり返さないように決意することである。

(2) 縁起のバイオエシックスは、人間個人の利益よりもむしろ、あらゆるいのち全体の関係性とその調和的な共生を重視する。あらゆるいのちの関係性を重視するとは、自己と他者との相互に恩恵 (benefit) があるということである。たとえば浄土真宗は、江戸時代、貧困を理由として行われる墮胎に反対した。それと同時に、養蚕によって絹糸を生産することを拒否した記録がある。なぜなら、蚕が成虫になるために作った繭をそのままお湯につけて蚕を殺し繭だけ取るという作業は、人のために罪のない蚕を殺すことを当然としていると考えたからである。その結果、浄土真宗の門徒は、蚕が成虫になって繭から抜け出た後の繭を用いて養蚕を行うようになったという。仏教徒が同じ生き物である蚕のいのちを思いやった一つの証である。

ふりかえてみれば、ヒトの受精卵だけを特別に神聖視する見方は仏教には見当たらない。人も動物も同じ仲間であると仏教は説いている。浄土真宗の究極的な目標は、動物、自然をも含む、自己と他者の救いである。したがって、バイオテクノロジーが人類の利益のためだけに応用されるのではなく、あらゆる生命を治療し、保護するためにも活用することが望まれる。具体的には、まず日本のような医療先進国だけでなく、世界の国々の難病を治療するために、この新しい医療が応用されることが望まれる。しかも ES 細胞の医療への応用は利益優先に陥ることなく、苦境におかれている患者を救済するという目的のみをめざすべきである。さらに動物や植物の病気を治療し、希少動物や植物の生存を保護するために、ES 細胞が医学的に応用されるならば、人類の知恵は、人類のためだけでなく、あらゆる生命の保護に寄与できるであろう。

(3) 縁起のバイオエシックスは、あらゆるいのちを、かけがえのないいのちとして尊重する。慈悲 (compassion) の心はあらゆる存在を、あたかも貴重な一子のように思いやる心である。

ヒト ES 細胞の医療への応用は、貴重なヒト受精胚を提供していただいた上ではじめて可能となる医療である。その意味で、この新しい医療をすすめるにあたって提供された貴重なヒト胚とその提供者に対して、深い感謝の気持ちを待たねばならぬ。新しい指針がまとめられるまでは、ともすれば「生殖補助医療で必要がなくなって廃棄される予定のヒト受精胚を利用する」「廃棄が予定されている胚を利用する」という表現を用いていた。そこには生殖に役立たなくなって棄てられるヒト胚を活用すればよいという計算がひそんでいた。役に立つかどうかで、胚に生殖胚と生殖に関係のない胚があるのではなく、ヒト胚は本来すべて尊い生命の萌芽であることを認識すべきである。世界中で使われている「余剰胚」という表現についても、すでに生殖補助医療に役立たなくなって余っているヒト胚という印象を与える。2001年9月25日の正式な指針では、この点を考慮し、一切「廃棄」という言葉を用いていない⁽¹⁹⁾。また同指針ではヒト受精胚の提供は必要最小限に限られるべきであると記している⁽²⁰⁾。その意味で、余剰胚を用いてヒト ES 細胞を樹立できるのだから功利的に望ましいという発想でいのちをみるのではなく、貴重なヒト胚とその提供者の同意に基づいて、はじめて実現する新しい医療であることを忘れてはならない。

まとめ：二つの視座 有用性よりもかけがえのなさを

最後に、仏教徒の生命に対する見方を明らかにするために、日常的なものの見方と比較して、いのちに対する二つの視座を提示しておきたい。二つ目の「縁起せるいのち、比べられないいのちとして感得する」視座が、縁起の倫理である。

1. 生命を有用性や効率性から把握する

・・・役に立つかどうか相対価値として対象を見る

Self attached approach (我執的アプローチ)

二つ以上のものの機能を比較し、対立させて、自己にとって役に立つか立たないかという有用性を基準として生命を捉える。ある患者のため、または、生きとし生けるもののために、自己のいのちを役立てることに意味がある。しかし、生命に序列をつけて、優位にある個人が特定の目的のために、弱者の生命を手段化することになる。自己中心主義、人

類至上主義にたつて、自然や他の生きものを自らの道具や手段として利用しようとする。

2. 比べられない生命として感得する

・・・希有の尊厳をもった生命として認めあい、支えあう

Interdependent approach (縁起的アプローチ)

自己中心的な主観を捨てて、自他の対立を破って、相手のありのままを知り、相手の中から相手を知ることによって、相手も自分も知られてくる⁽²¹⁾。存在の意味とは、生きとし生けるもの一つひとつが、宇宙の中で他と比べられない貴重な意味を持っているということである。さまざまないのちにささえられて、今ここに自己があることにめざめたとき、他の存在に対する慈悲・感謝・責任の心が育まれてくる。相互依存の世界においては、自己も孤立した存在ではなく、縁あるところから世界を支えることができる。自然や他の生きものを自らの仲間、家族として思いやり、際限のない欲望を抑制して、人間と他の生命体と自然とが支えあって生きていくことが願われる。相依相照型、循環型社会を願って、一人ひとりの人間が他の存在に対する慈悲・感謝・責任の心をもって生きていく。

最後に、私の恩師であるロナルド仲宗根の言葉を引用して、さとの倫理をまとめておきたいと思う。

We live in an interdependent world. All beings and all things are mutually dependent. Interdependence provides Buddhists with a vision of identity and responsibility to all beings. Interdependence also quickens a sense of gratitude for all things and beings⁽²²⁾.

(日本語訳) 私たちは縁起の世界に生きている。あらゆる生命と存在は互いに依存している。縁起は、仏教徒に、あらゆる存在に対する共感(自他一如感)と責任とを与える。縁起はすべての存在に対する感謝の気持ちを思い起こさせるのである。

縁起の思想を通した仏教のいのちの見方は、存在の希有性(かけがえのなさ)存在の相互関係性、存在の相互依存による生起性があげられた。ひとつのいのちの尊厳ということは、あらゆるものが支え合って生きているという相依相成の関係のなかで成立する。逆に言えば、一個人が自己の都合のみを優先し、相互に依存していることを軽視して、他の存在をあたかも我がものように操ったり、他の存在と対立して傷つけ殺しあったりしてはならないということ、縁起の世界観は示している。このような縁起の世界観に導かれて、人

間は、生命体の強さや弱さ、大きさや小ささなどに関係なく、また差別することなく、あ
たかも自分自身の子供を愛するように、あらゆる生命体に思いやりの心をもって接するこ
とができるだろう。

註

- (1) 徳永道雄「宗教とヒューマニズム」32～33頁。宗教と倫理第一号 2001年11月
- (2) 加藤尚武『環境倫理学のすすめ』81頁。丸善ライブラリー。1991年。倫理学者加藤尚武(かとうひさたけ)によれば、環境倫理には三つの姿勢があると指摘した。第一に、人間だけでなく、自然も生存の権利を持つ。(自然物の生存権)第二に、現代の世代は未来の世代が生存できるように環境を保護する責任がある。(世代間公平)第三に、地球の生態系の生存が他の目的よりも優先する(地球全体主義)
- (3) 縁起のバイオエシックス 人クローンに関する浄土真宗からの一考察」単著 2001年(平成13年)1月 真宗学103号。Naoki Nabeshima, “Bioethics of Interdependence: A Shin Buddhist Reflection on Human Cloning”, *Issues for the Millennium: Human Cloning and Genetic Technologies*, Boston University Press. Aug. 2000
- (4) 中村桂子『生命科学』59頁。講談社学術文庫。講談社学術文庫。1996年。
- (5) 松長有慶『仏教と科学』207～210頁。岩波書店。1997年。徳永道雄「宗教とヒューマニズム」34～35頁。宗教と倫理第一号。
- (6) 本願他力とは、あらゆる衆生を苦しみから安らぎに導く仏の智慧と慈悲の本願力である。他力は、中国浄土教の曇鸞が阿弥陀仏の本願を特徴づけるために初めて用いた思想である。曇鸞の『往生論註』によれば、衆生が浄土に生まれること(往相)も、浄土に生まれてからさまざまなたらきをあらわすこと(還相)も、すべてみな阿弥陀仏の本願のはたらき、他力によると明かした。そして曇鸞は、他力、すなわち仏のはたらきは、人々が速やかにさとりを得るための最も勝れたはたらき(増上縁)であると記している。これを承けて親鸞は、他力とは、阿弥陀如来の本願力であり、その仏の本願力を信樂する心であると明かしている。すなわち、他力とは仏の本願力であるとともに、仏の大智と大悲が衆生の心に満入した信心でもある。そして他力とは、自己の力を頼みにして、さまざまな行を修行する自力を否定する概念であり、人間の側からの一切の計らいを交えない仏教的な世界観である。ただし、他力とは、単に、自に対立する他、もしくは自己に対立する他者を意味するものではない。すなわち他力の概念は、たとえば主観に対する客観、自己に対する他者に相当するような、二元的な対局概念ではない。なぜなら、他力とは自と他との二元的な対立性を超えた

仏の大悲であるからである。他力は人間の自他という分別や思議を超えた如来の大智・大悲の世界である。そしてその如来の大智・大悲の本願他力が、一切の衆生をかけがえのない一子のように思い育み、この仏の自他一如なる救済によって、愚痴なる人間が清浄なる浄土に生まれていくことができるのである。

それでは、以上みてきた他力の典拠となる文章をあげておきたい。まず曇鸞は他力について次のように明かしている。「『論』(論註・下)にいはく、「本願力といふは、大菩薩、法身のなかにして、つねに三昧にましまして、種種の身、種種の神通、種種の説法を現じたまふことを示す。みな本願力より起るをもつてなり。……問うていはく、なんの因縁ありてか 速得成就阿耨多羅三藐三菩提 といへるやと。答へていはく、『論』(浄土論)に 五門の行を修してもつて自利他成就したまへるがゆゑに といへり。しかるにまことにその本を求むれば、阿弥陀如来を増上縁とするなり。他利と利他と、談ずるに左右あり。もし仏よりしていはば、よろしく利他といふべし。衆生よりしていはば、よろしく他利といふべし。いままさに仏力を談ぜんとす、このゆゑに利他をもつてこれをいふ。まさに知るべし、この意なり。おほよそこれかの浄土に生ずると、およびかの菩薩・人・天の起すところの諸行は、みな阿弥陀如来の本願力によるがゆゑに。なにをもつてこれをいへば、もし仏力にあらずは、四十八願すなはちこれいたづらに設けたまへらん。いま的しく三願を取りて、もつて義の意を証せん。仏願力によるがゆゑに、常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。常倫に超出し、諸地の行現前するをもつてのゆゑに、このゆゑにすみやかなることを得る三つの証なり。これをもつて他力を推するに増上縁とす。しからざることを得んやと。」(行巻他力釈 曇鸞『往生論註』引用 真聖全二の三五～三八頁。浄土真宗聖典一九〇～一九三頁) 次にこれを承けて、親鸞は行巻他力釈などにおいて、他力について次のように記している。「他力といふは如来の本願力なり。」(行巻他力釈 真聖全二の三五頁。浄土真宗注釈版聖典一九〇頁)「他力と申すことは、弥陀如来の御ちかひのなかに、選択摂取したまへる第十八の念仏往生の本願を信樂するを他力と申すなり。如来の御ちかひなれば、「他力には義なきを義とす」と、聖人(源空)の仰せごとにてありき。義といふことは、はからふことばなり。行者のはからひは自力なれば義といふなり。他力は本願を信樂して往生必定なるゆゑに、さらに義なしとなり。」(『末灯鈔』第二通 真聖全二の六五八～六五九頁。浄土真宗聖典七四六頁)「すべて行者のはからひなきをもちて、このゆゑに他力には義なきを義とすとするべきなり。」(『正像末和讃』 真聖全五三〇頁。浄土真宗聖典六二二頁)「如来の願力なり。他力とまふすなり。……『他力には義のなきをもつて義とす』と、本師聖人(源空)の仰せごとなり。「義」といふは行者のおのおのはからふところなり。このゆゑにおのおのはからふところをもたるほどをば自力といふなり。よくよくこの自力のやうをこころうべしとな

り。)(『尊号真像銘文』末 真聖全二の六〇三頁。浄土真宗聖典六〇三頁。)'ともかくも行者のはからひをちりばかりもあるべからず候へばこそ、他力と申すことにて候へ。)(『末灯鈔』第十三通 真聖全二の六七四頁。浄土真宗聖典七九三頁)'本願他力をたのみて自力をはなれたる、これを「唯信」といふ。)(『唯信抄文意』真聖全二の六二一頁。浄土真宗聖典六九九頁)また英文翻訳“Shinran”第二巻の Glossary of Shin Buddhist Terms の“ Other Power ”の説明も参照した。(The Collected Works of Shinran, Volume 2. P.198. Translated by Dennis Hirota, Hisao Inagaki, Michio Tokunaga, and Ryushin Uryuzu. Kyoto: Jodo Shinshu Hongwanji-ha. Translated, with introductions, glossaries, and reading aids, by Dennis Hirota, Hisao Inagaki, Michio Tokunaga, and Ryushin Uryuzu, Kyoto: Jodo Shinshu Hongwanji-ha.1997.)

(7) 文部科学省研究振興局ライフサイエンス課生命倫理・安全対策室から出されているウェブサイトには、ES細胞の説明や主要先進国における生命倫理に関する規制の状況などが紹介されている。

http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/seimei/2001/es/010901c.pdf

(8) 文部科学省の「ヒト ES 細胞の樹立及び使用に関する指針」第一章総則第一条五には、「多能性内胚葉、中胚葉及び外胚葉の細胞に分化する性質をいう」と記されている。また文部科学省によるこの指針の解説によれば、「すべての細胞・組織は、神経や皮膚になる(分化する)「外胚葉」、筋肉、骨や生殖細胞に分化する「中胚葉」、消化管、肝臓などに分化する「内胚葉」のいずれかに由来するため、三胚葉に分化することができればすべての細胞になり得ることとなる。よって、多能性についてはこのように定義した。」と記され、参考として、NIH 報告書における“Stem Cells”の定義を次のように引用している。“Pluripotent stem cell (PSC): A single stem that has the capability of developing cells of all germ layers(endoderm, ectoderm, and mesoderm).” 日本語訳 多能性幹細胞 = 一の幹細胞であって、すべての胚葉(内胚葉、外胚葉及び中胚葉)の細胞に分化する能力を有するもの。この文部科学省の作成した「ヒト ES 細胞の樹立及び使用に関する指針の解説資料」(総47頁中の3~4頁参照)は、次のウェブサイトで見ることができる。

http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/seimei/2001/es/010901f.pdf

(9) <http://www.nih.gov/news/stemcell/index.htm>

(10) 文部科学省の作成した「ヒト ES 細胞の樹立及び使用に関する指針の解説資料」4頁参照。

http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/seimei/2001/es/010901f.pdf

(11) 平成13年文部科学省告示第155号「ヒト ES 細胞の樹立及び使用に関する指針」は、文部科学省のウェブサイトでも公開されている。

http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/seimei/2001/es/010901.htm

(12) 文部科学省の「ヒト ES 細胞の樹立及び使用に関する指針の解説資料」には、「ヒトの初期発生に

においては、受精後約14日後に「原始線条」という細い溝が出現するが、発生学においては、この出現によって内胚葉、外胚葉及び中胚葉の三胚葉に分かれ、身体各機関の形成（各細胞・組織への分化）が始まるとされており、この時期以降のヒト胚については研究に用いてはならないものとした。同様の基準は、日本産婦人科学会が示している会告や諸外国の規制においても用いられている。

(参考1) 日本産婦人科学会会告：ヒト精子・卵子・受精卵を取り扱う研究に関する見解（抄）

2. 精子・卵子・受精卵の取り扱いに関する条件

精子・卵子及び受精卵は、提供者の同意を得たうえ、また提供者のプライバシーを守って研究に使用することができる。

- 1) 非配偶者間における受精現象に関する研究は、その目的を説明し、十分な理解を得た上で、これを行う。
- 2) 受精卵は2週間以内に限って、これを研究に用いることができる。
- 3) 上記期間内の発生段階にある受精卵は凍結保存することができる。

(参考2) 英国法 'Human Fertilisation and Embryology Act,' 1990, ヒト受精・胚研究法(1990年)(抄)

3. Prohibitions in connection with embryos: 胚に関する禁止行為 (3) A license cannot authorize (a) Keeping or using an embryo after the appearance of the primitive streak, (b)-(d) 略 「原始線条出現以降の胚の保存又は使用を許可することはできない」 (4) For the purpose of the subsection (3) (a) above, the primitive streak is to be taken to have appeared in an embryo not later than the end of the period of 14 days beginning with the day when the gametes are mixed, not counting any time during which the embryo is stored. 「上記の(3)(a)の規定について、原始線条は、配偶子が混合された日から起算して14日以内に胚に出現したものとする。ただし、胚が(凍結)保存されている期間は算入しない。」(指針の解説資料8頁)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/seimei/2001/es/010901f.pdf

- (13) 『歎異抄』第五章 真聖全二の七七六頁。浄土真宗聖典八三四頁。The Collected Works of Shinran, Volume 1, p.664. この文は『心地観経』の「有情輪廻して、六道に生ずること猶し車輪の始終無きが如し。或いは父母と為り、男女と為りて、世々生々に互いに恩あり。」(大正蔵三の三〇頁)による。
- (14) 『浄土真宗聖典 歎異抄(現代語訳版)』十～十一頁。本願寺出版。一九九八年。
- (15) 親鸞は『涅槃経』に基づいて、一子地の思想を重視する。『涅槃経』における「一切の衆生は、悉く仏性を有する」という教理を、仏があらゆる衆生を一子のごとく護り育てるという思想として、親鸞は理解するのである。ただし注意すべきことは、親鸞は仏性を、実体として、それぞれの存在

の中に認めたのではない。具体的にいえば、遺伝子が仏性に相当するといった見方を仏教が示したのではない。親鸞において仏性とは、仏の慈悲の実現、すなわち、あらゆる存在に仏の慈悲が遍満し、貫徹しているという見方を意味する。言い換えれば、その見方とは、森羅万象すべてに、仏に連なる尊厳性を再発見し、すべての存在をありのままに分け隔てなく尊重する態度を示している。

(16) 源信『往生要集』上巻に記されているこの教説を、親鸞は行巻に引用している。真聖全二の三二頁。浄土真宗聖典注釈版一八四頁。 *The True Teaching, Practice, and Realization 2*. Ibid., p.52.

(17) 『浄土和讃』一一四。真聖全二の四九九頁。浄土真宗聖典注釈版五七七頁。 *Hymns of the Pure Land*, no.114. Ibid., p.356.

(18) 『唯信抄文意』。真聖全二の六五〇頁。浄土真宗聖典注釈版七〇九頁。 *Notes on 'Essentials of Faith Alone'*. Ibid., p.461.

(19) 特定胚の取り扱いに関する要件について指針(案)の第4条では、当初「ヒト受精胚が生殖補助医療の用に供するために作成されたものであって、かつ、廃棄が予定されているものであること」と記されていたが、最終的にまとめられた指針第六条一では、下線部を「当該目的に用いる予定がないものうち、滅失させる意思が確認されているものであること」に修正されている。さら「指針の解説資料」(七頁)によれば、将来の可能性として、患者の体細胞の核を除核卵に移植し、患者と同一の遺伝子構造を有する人クローン胚を作成し、そこからヒトES細胞を樹立することにより、免疫拒絶反応のない移植医療・細胞治療を行うことも想定されている。イギリスでは、人クローン胚からのES細胞の樹立による医療技術の枠組みができていますが、日本では、ヒトクローン胚からのES細胞の樹立は認めないと言明している。

(20) 指針第六条四の2には、「提供医療機関によるヒト受精胚の樹立には必要不可欠な数に限るものとする。」と記され、指針の解説資料にも、「ヒト胚が人の生命の萌芽であるという認識のもと、ヒトES細胞の樹立に係るヒト受精胚の滅失は必要最小限に限られるべきである、との考え方からこの規定を定めた。」(八頁)と記されている。

(21) たとえば、自己の主観を捨てて、相手の立場になり、自己と相手とが一つになって見えてくる世界を表した歌に、種田山頭火(1882~1940)の歌がある。「雑草の よるこびの雨に ぬれてゆく」「春風のとびらをひらけば 南無阿弥陀仏」

(22) Ronald Y. Nakasone. "Exploring the limits of Buddhist Thought: The Case of Theresa Ann Campo Pearson," pp.326. *Bukkyo Shiso Bunkashi: Essays in Honor of Professor Takao Watanabe*. Kyoto: Nagata Bunshodo.1997.

(付記) 文部科学省研究振興局ライフサイエンス課生命倫理・安全対策室のウェブサイトにてヒト ES細胞について次のように紹介されている。

「 ES細胞について」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/seimei/2001/es/010901c.pdf

「主要先進国における生命倫理に関する規制の状況」(平成14年1月17日現在)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/seimei/2001/es/010901d.pdf

キーワード : 科学と仏教、縁起的な生命観、かけがえのないいのち、バイオエシックス、親鸞

Keywords: Science and Buddhism, A view of life through Interdependence, irreplaceable life, bioethics, Shinran